

## 親族研究の消滅はあったのか —日本の教科書の記述から—

Restoring Kinship Studies to Japanese Anthropology Textbooks

小川正恭\*

Masayasu OGAWA\*

**要約**：しばらく前から文化人類学者の間では、親族研究が衰退ないし消滅したという話が広まっていた。2003年の研究大会でも、教科書における親族研究に関する記述は減少しつつあるとの指摘がなされていた。だが、研究者たちは文化人類学の概説書や入門書などの編集に際して、その理由を示した上で親族の章を省略していたのだろうか。1991年以降の主な教科書と思われるものを取り上げ、欧米で親族研究の終焉と復活が語られる際に登場する2人の研究者(シュナイダーとニーダム)への言及の有無を主な手がかりとして、この問題を検討した。その結果、欧米では親族研究の衰退が1970年代中頃から20年間ほどの期間とされるのに対し、日本では教科書で見られる限りは1995年から2005年にかけての約10年間に似たような事態が生じていたことが認められた。ただし、欧米の研究動向にかなり遅れながら追随し、代表的な2人による批判が明確に述べられないままに親族研究の扱いは減少していたが、それでも消滅にはいたらなかった。そして、2005年頃からの復活は、親族研究の減少期に比べれば西欧との「時差」もそれほどない対応であり、問題点への言及が行われつつ始められているようである。しかし、この間の教科書には親族研究に対するあいまない態度が多く見られ、親族を取り扱わない場合にもとくに説明はなされていなかった。

### はじめに

2003年の日本民族学会(現在は日本文化人類学会)研究大会(第37回)の、ある分科会が「文化人類学の教科書・概説書」に関するいくつかの報告を行っていた<sup>1)</sup>。その中の1つの報告で「次第に親族に関する記述が減少し、あるいは、項目がない場合もある」との指摘がなされていた。この指摘に関して、もう少し具体的にそれぞれの教科書・概説書(以下、便宜

---

\* 武蔵大学教授

的に教科書とする)はどのように扱っているかを調べたいと考えた。換言すれば、ニーダムとシュナイダーの名を挙げて「親族」という項目を立てることの困難さを訴えているか、を確認しようとしたのである。しかし、多くの教科書では、特に説明がないままであることが判明した。

上述の報告につけられた一覧表にのった教科書は2000年までであり、もう少し具体的に分かる目次項目が示されたリストでは1991年までの教科書が取り上げられていた。今回はそこでは取り上げられていなかったが授業等に利用された可能性が高い教科書を加えながら、1991～2006年の間に発行され、直接に点検できたもののみを対象とした。

なお、本論は、2005年7月2日に開催された日本民族学会懇話会<sup>2)</sup>で話した内容の一部に基づいている。それに、2007年7月7日に開催された、武蔵社会学会第7回年次大会において「親族」研究の終焉は正しく記述されたか 一人類学の概説書を通して<sup>1)</sup>として筆者が発表した内容に加筆して、補足している。

本論の趣旨はつぎのとおりである。2人の高名な研究者(シュナイダーとニーダム)により親族研究が「破壊」された後、しばらくの間、親族研究(および、その結果としての論文)が減少したと言われる。そのような言説の影響を受けたためか、日本で発行された教科書において、親族研究は明らかに登場の機会が少なくなった。具体的には、親族の章・節が教科書において無くなるか、薄まる、あるいは、分散させられたのである。ただし、研究者向けの専門的な文献・論文の中では、細々と論じられてはいたのである<sup>3)</sup>。そして、欧米で親族研究の分野が「復活」してくるに従い、日本でも少しずつその存在が目につくようになってきた。教科書レベルでの親族研究の扱いに、この間の経緯の説明があったのだろうか、気がつかないうちに姿が消えたとしたら、ただ欧米の研究動向に追随したに過ぎなかったのではないかと思われる。

## 1. 親族研究の消滅と復活

### (1) 消滅

先に述べた親族研究動向の変化をストーン (Stone 2004) の「概説」を手がかりに見てみよう。ストーンはパーキン (Robert Parkin) とともに、約 450 頁という分厚いリーディングス『親族と家族』を編纂・刊行した。その第Ⅱ部第1章「親族の消滅と復活」の「概説」において、イギリスとアメリカで従来の研究に対する強力な批判が出されたのを契機に親族研究が零落し始めた、と述べている。1971年にイギリスでは、ニーダムが通文化的比較を行うにはもっと厳密な道具たる概念群を用意すべきであり、現状の比較研究は一般化に適さないと主張した。アメリカではシュナイダーが1972年に「親族は人類に知られているいかなる文化においても存在しない」(1972: 59) と宣言し、親族研究に致命的な効果をもたらした(ストーンの表現では、「爆弾が投下された」)のである。そのためにこの宣言が「ほぼ20年以上に渡って人類学で親族をほとんど主題になりえないものとするのに、特に強力な役割を果たした」(Stone 2004: 242) ののである。ただし、ストーンが指摘しているように、この零落は人類学研究を取り巻く当時のさまざまな知的状況の変化、とくに1980年代の「他者の表象」に関するポストモダンからの攻撃という状況の中で生じた現象でもあった(241-242)。ストーンの2001年の著作でも同じく、「20年以上にわたって1冊の親族の教科書も出版されずにいた」(2001: 2) と表現されていた。

同様のとらえ方は、『親族の文化的分析—D.M. シュナイダーの遺産』(2001)の編纂者の一人であるファインバーグ (Richard Feinberg) による次のような指摘にも認められる。「『人類に知られているいかなる文化においても親族は存在しなかった』というシュナイダーの声明の後、1970年代中頃のある時期から、親族研究はほとんどと言っていいほど消えていった」(2001: 2)。あるいは、「(シカゴ大学の) 同僚の研究者の多くは組織的

な形では親族関係の研究を単に止めることでこれ(筆者注—親族関係は通文化的な普遍現象ではなく、親族関係など存在しないとの提唱)に反応した。その結果、過去20年間にわたり親族に関する著作、論文、会議での発表がきわめて僅かになった」(2001: 14)と回顧している<sup>4)</sup>。

なお、シュナイダーの主張や見解を要約するのはきわめて困難であるが、おおまかには、次のような展開になる。1968年の『アメリカ人の親族: 文化的説明』では、親族を象徴体系とする立場から分析しており、1969年の論文で「先行の研究者たちが用いてきた意味での「親族」はアメリカには存在しない」と述べた。親族を象徴体系として扱うということは文化的に構築された観念とみなすことになるが、親族(関係)がアメリカ文化の中には独自に識別される領域としては存在しないという結論に達したのであった。さらに、1984年の『親族研究批判』では「親族」一般を否定する主張を展開した。当然に、彼の批判は、1910年にリヴァーズが「人類学的調査における系譜的方法」で確立したとされる生物学的根拠に基づく通文化的な分析方法(系譜の採用)に向けられた。1984年の著作ではかつてヤップで自らが実施した調査成果をも批判的に検討し、彼はその否定を通して、世界中どこでも「生殖という自然科学的事実に基づく分析カテゴリーとしての親族」を適用しようとするリヴァーズ以降の研究は、西欧の民俗的思考方法の押しつけ、西欧の自己中心主義に過ぎないと断言した。(この論議の詳細な検討は別の機会に行われるべきであろう。)

ニーダムは自らが編集した『親族と婚姻の再考』(1971)の第1章として「親族と婚姻の分析に関する見解」を執筆した。その中で「親族 kinship」という節(1971: 3-5)を置き、親族とはいったい何であるかと問うている。「この用語によって、明確に識別できる1種類の現象、あるいは、明確な理論の型を意味することはできない」と述べる。言い換えると、「ある制度が「親族」に関わるとの報告によって、いかなる情報もたらされるのだろうか。実は社会的事実に関して何も無いのだ」。結論は「だから、ぶしつけに申すならば、親族などといったものは存在しないのであり、当然のことな

がら、親族理論なるものも存在し得ないのである」と宣言した。しかし、廃棄しなくともよいが、と言いつつであった (1971 : 5)。

このイギリスの状況についてアメリカの論者はそれほど言及していない。わずかにストーンが「ニーダムのそれほど急進的ではない批判は、1970年代と1980年代のイギリスで大きな影響を及ぼしたらしいのである」(2004 : 242)と触れているくらいである。イギリスの代表的な社会人類学者の一人であるクーパー (Adam Kuper) によると、イギリスの人類学者は1960年代～1970年代に、親族が血縁でもなく、系譜的にも測定されないとしたらいったい何なのかと、活発な議論を交わしていたのだという。クーパーによっても、ニーダムは「親族などというものは存在しない」とラディカルな立場を表明しつつも、親族研究を放棄すべきだと言うまでには至らなかった、と指摘されている (1999 : 147-148)<sup>5)</sup>。

シュナイダーと違って比較研究の可能性を否定しないニーダムは、その後、比較を可能にするカテゴリー (クラス) を求め、ヴィトゲンシュタインに依拠しながら「多配列」の概念に基づく考察を展開することになった。その論議の行方に関しては吉岡政徳が丹念な研究を積み重ねているので、吉岡の論考 (2005)<sup>6)</sup> を参考にしながらニーダムの検討の仕方を見ておこう。自然科学分野で用いられる単配列分類と多配列分類という概念を梃子として利用し、親族の通文化的比較に耐えうる概念を作れるのではないかと、ニーダムは考えたのである。人類学の概念 (例えば「親族」などの術語に当たる) で社会現象を分類する際には、共通の特性を有する諸個体 (便宜上、分類項目を吉岡にならい「個体」の語を用いる) が同じ一つのクラスにまとめられているはずである、あるいは、現にまとめられていると考えられる。だが、実際に人類学者が「親族」などの概念で何らかの社会現象を分類した結果もたらされるのは、そこに含まれる諸個体が互いに類似しているが、それらすべてに共通する特性は認められないような一つのクラスなのである。このようなまとめ方は多配列分類によるものである。人類学者が通文化的比較の前提に据えた分類方式はこの多配列分類に基づ

くものであったのだ。なぜならば、人類学者が対象とする社会的な現実自体がそのような性質のものであったからである(2005: 93-135, とくに 95-99)。吉岡は別の論文(2007)<sup>7)</sup>でこのニーダムの研究をいっそう綿密に分析し、その限界を指摘し、乗り越える見通しを示唆している。それらの吉岡による丁寧な分析から一部分を取り出し、強いて短縮すれば、以上のようになろう。

なお、上杉富之は、ニーダムによる「親族」否定について、「親族研究における行きすぎた「脱構築」があり、それへの反省」が親族研究の転換の一つの要因であった、と取り上げている(2002: 397, および、注 20)。

いずれにせよ、1970年代の中頃からほぼ20年間近くの間、親族研究の衰退があった、少なくともアメリカの人類学を中心にそうした状況が見られた、と考えてもよいのである。

## (2) 復活

ストーンとファインバーグは親族研究がどのように復活したと捉えていたのだろうか。ファインバーグは上述の概説の終わりに、親族研究を巡ってシュナイダーの主張がもたらした3つの貢献を上げている。それらは、第1に、太平洋諸島の民族誌的調査を興隆させたことである。第2に、生物学の制限から親族研究を解放したので、フェミニスト人類学者らがジェンダーを文化的構築物として研究するのを容易にした。ジェンダー概念に真の対等性、多様性が取り入れられ、家族的役割や関係について、新しい視点で取り組めるようになった。第3に、生物遺伝学的な基盤から解放された親族研究を、養取(adooption)や新生殖医療技術が提起する多くの問題に向かわせるようにした(2001: 24-25)。

ストーンは、1990年代の半ばまでにヨーロッパ中心主義を脱してより開かれた親族研究が始まり、その意味での親族研究が復活したと、述べている。最初はジェンダーと密接に結びついたフェミニズム人類学としてであった。次いで、新生殖医療、ゲイとレズビアン親族、離婚率の上昇、

再婚、養取（養子）など、近年の社会問題に目が向けられた。さらに、政治経済学の領域と関連させる研究もはじめられた、というのである。ただし、「シュナイダーの研究成果が、親族の零落と、間接的にだがその復活には大変に有効な手段であった」（2004：241）と付け加えており、シュナイダーが予想もしていなかった形で、彼の批判＝破壊が上記の結果をもたらしたと説明するのである<sup>8)</sup>。

ともかく、親族研究の再登場は、日本も含めたいわゆる欧米先進諸国、とりわけアメリカにおいて家族や親子のあり方がさまざまな問題を抱える事態、いわゆる社会問題化したことへの対応の一環としてであったとされる。新生殖医療技術が関係する夫婦・親子の関係を巡る研究は、文化人類学の立場からの成果としてこうした社会的な問題の分析と理解に貢献しようのように、提供可能であると考えられている。

## 2. 日本の状況

### (1) 消滅と復活

上杉は「日本の人類学界では親族研究の現状が適切に評価されておらず、したがってまた、親族研究の新たな展開の可能性を見過している」（2002：390）ことを、2つの論考、田中（1995）と瀬川（1997）を取り上げて指摘した。田中の論点は、人類学に4つのパラダイムがあるが、支配的パラダイムが変わってきたため、親族研究の課題・方法も変わってきた。つまり従来の親族研究は衰退し、新たな模索が始まったと見ることにあつた。瀬川の論点は、関心領域や調査対象が親族以外のテーマやトピックに向けられるように変化したことを強調する説明なのだ<sup>9)</sup>。さらに、日本では人類学の親族研究が死んだと評価するその他の研究者にも触れつつ、上杉は「1990年代半ば以降に顕著となった、欧米の人類学界における家族・親族研究の高まりを的確に反映したものであるとほいいたい」と述べている（2002：392）。

上杉の論文は、本稿の「1 親族研究の消滅と復活」でおおまかに扱って  
おいた親族研究の変遷を、たいへん巧みに要約しながら検討したものであ  
る。だが、そこでは研究者間の論議というレベルで問題が提起されている  
のに対し、筆者は本論で、主に大学の授業で教科書として利用されることが  
多いと思われ、さらに、一般の人からは概説・入門書として読まれること  
も多そうだとみられる出版物の内容というレベルで同じ問題の検討を行  
うものである。

## (2) 日本における人類学の教科書

「はじめに」で言及した日本民族学会の分科会で、第2報告は「人類学の  
教科書・概説書リストについて—プロジェクト基礎資料の作成から—」で  
あった。会場で配布された報告資料の中に「戦後出版された教科書一覧」  
と「目次項目リスト」が挙げられている。「目次項目リスト」には「1960年  
～1990年前後までの代表的な教科書を選択」という注記がある。それら  
を用いて発表者の田口理恵は、戦後の人類学教科書を目次構成で3つの時期  
に分けていた。その中の第2期の特徴の1つとして、出版物の多様化が見  
られると指摘した上で、代表的な教科書の多くは「環境—生業(経済)、社  
会組織、政治、宗教」にその他の分野が付加された構成であるといい、こ  
の括弧(「 」)内の組み合わせを「4題話」と表現した。その「社会組織」  
の中心には「親族組織」が据えられていたのである。

これら2つの資料を基にした分析が行われ、田口によって何点かの興味  
深い指摘が述べられたが、その中で筆者にとって強い印象を与えたのは  
「次第に親族に関する事項が少なくなっている」との指摘であった。その後  
も、おもに筆者の勤務先における授業の経験をとおして、あるいは、学会  
で発表される研究テーマの変化をとおして、親族研究への関心が次第に減  
少していると感じてきた。

では、1990年前後から現在に至る期間で、気になる上述の指摘に関して  
どのような状況が生じていたのだろうか。本論でも、同じように代表的と



思われる教科書<sup>10)</sup>について、「親族」に関する言及がどのようになされているか、はたして「4 題話」なる構成は持続しているのだろうか、を見てみよう。これらを確認するために2つの表(1, 2)を作成した。この2種類の表によって、(1) 親族研究が教科書(以下の文中では1~23の番号を用いる)においてどう位置づけられているか、(2) シュナイダーとニーダムの行った批判が取り上げられているか、および、(3) 索引において2人の名前は項目として登場するのか、という3つを主な視点としながら、親族研究の扱われ方を検討した。

### (3) 表1について

#### ① 出版年と傾向

この表の範囲外であるが1980年代の間、そして90年代の初めには、本論でいう意味の教科書と呼べる出版物が各年何冊も刊行されていた。教科書とは何かをあまり厳密に定義せず、表題を主要な手がかりとしたため、おおよその傾向であるが、この表に取り上げられた期間についてみると、ほぼどの年にも1~2冊刊行されている。ただし、2002年には3冊、03年には4冊と多いが、今後とも教科書タイプがまた多く出版されるかは判断しがたい。

#### ② 親族の章の有無

親族の章がないものは、7(1997)から20(2003)までの間に7点、少しあると言えるもの3点がある。親族がまとまった1つの章としてあるような教科書の構成は減少してきたことは認められる。後述するように、「教科書」的なスタイルとはかなり異なる構成をとるものに多く見られる特色である。しかし、全体として親族研究への言及が減っていることに変わりはない。

#### ③ 論点は取り上げられたか

##### (イ)「シュナイダー」の取り扱い

シュナイダーの親族研究批判への言及については、23点のうち明示

表 1 言及の有無

文献		親族研究の扱い方									
		シェンナイダー					ニューダム				
番号	出版年があるか	親族の言及があるか	論点への言及	索引項目	備考	論点への言及	索引項目	備考	その他		
1	1991	○	C	○	アメリカ文化と家族(愛)については言及	A	○	通過儀礼に関する言及	リーチの婚姻の定義批判に言及		
2	1993	○	C	×		C	○				
3	1994	○	B	索引なし	実質的に内容の一部を説明	C	索引なし				
4	1995	○	A	○	民俗カテゴリー、象徴論に言及	C	×				
5	1995	○	C	○	交叉イトコ婚に關して言及	A	○	交叉イトコ婚に關して言及			
6	1996	○	C	索引なし		C	索引なし				
7	1997	×	B	○	親族の象徴人類学と言及	C	○				
8	1998	×	C	索引なし		C	索引なし		南米研究		
9	1998	△	B	索引なし	自省的批判、認識枠組の問題として言及	C	×		「日本の人類学」を捉え直す試み		
10	1999	○	C	×	交叉イトコ婚に關して言及	C	×		日本の民俗社会の分析		
11	1999	△	C	索引なし		C	索引なし				
12	2000	△	C	索引なし		C	索引なし				
13	2001	×	C	索引なし		C	索引なし		8つの地域・社会の研究		
14	2002	○	C	×		C	○	通過儀礼に関する言及			
15	2002	×	C	索引なし		C	索引なし		フナールドワークの仕方他		
16	2002	×	C	×		C	○	世界観、儀礼に關して言及	術語集		
17	2003	○	C	×	交叉イトコ婚に關して言及	C	×	モデル論の中で言及	「親族研究の衰退」の文言はある		
18	2003	○	C	×		C	×				
19	2003	×	C	索引なし		C	索引なし				
20	2003	×	C	索引なし		C	索引なし				
21	2005	○	B	×	実質的に内容の一部を説明	B	○	実質的に内容の一部を説明			
22	2005	△	A	○	「American Kinship」を讀む1章がある	C	×				
23	2006	○	B	×	実質的に内容の一部を説明	B	×	実質的に内容の一部を説明			

(1)親族の章があるか:ある○ 部分的にあり△ なし× (2)論点への言及:ありA 一部ありB なし× (3)索引項目:あり○ なし× 索引なし

表 2 筆筆者等および該当の章・節

(表2 執筆者等 および 該当の章・節)	書名	著者	出版社
1	1991 村武博一・佐々木宏幹編	文化人類学	出版社
2	1993 波平恵美子編	文化人類学	有斐閣
3	1994 浜本満他編	人類学のコモセンセンス・文化人類学入門	医学書院
4	1995 河合利光編	生活文化論	学術図書出版社
5	1995 米山俊直編	現代文化人類学を学ぶ人のために	4 血縁 一血は水より濃いから 3章 家族と社会生活 2節 家族と婚姻 1-1 人類学のパラダイム 一理論と親族
6	1996 木山英明	文化人類学がわかる事典	建帛社
7	1997 山下晋司・船曳建夫編	文化人類学キーワード	世界思想社
8	1998 大貫良夫他編	文化人類学の展開	日本実業出版社
9	1998 船曳建夫	文化人類学のすゝめ	有斐閣
10	1999 宮本勝・清水芳見編	文化人類学講義 一文化と政策を考える	北南出版
11	1999 波平恵美子	暮らしの中の文化人類学 平成版	筑摩書房
12	2000 森部一他編	文化人類学への誘い	八千代出版
13	2001 森部一他編	文化人類学を再考する	出窓社
14	2002 波平恵美子	文化人類学 カレッジ版第2版	みらい
15	2002 住原則也他編	異文化の学び方	青白社
16	2002 綾部恒雄編	文化人類学最新語100	医学書院
17	2003 江刺一公	文化人類学 一伝統と現代一	世界思想社
18	2003 中島成久	グローバリゼーションのなかの文化人類学	弘文堂
19	2003 斗風正一	目からウロコの文化人類学	放送大学教育振興会
20	2003 綾部恒雄編	文化人類学のフロリアイ	興会
21	2005 奥野克己・花刺馨也編	文化人類学のレッスン フィールドからの提案	明石書店
22	2005 山下晋司編	文化人類学入門 一古典と現代をつなぐ20のモデル	ミネルヴァ書房
23	2006 綾部恒雄・桑山敬己編	よくわかる文化人類学	ミネルヴァ書房

2 親族の間係と互酬 一3 婚姻と性関係の諸規定  
2章 個人・家庭・社会  
3章 家族と社会生活 2節 家族と婚姻  
I-1 人類学のパラダイム 一理論と親族  
2章3(離婚) 4(親族名称) 4章 インセストタブーの起源 5章 家族と結婚と仲間たち  
12 象徴人類学  
II 文化人類学が、今、明らかにしつつあること「日本の人類学 清水昭俊」3多元的な認識枠組み  
II 家族と人間 section1 親子と家族 section2 家族と社会  
「イデオロギーとしての母系出自集団」という章がある。  
2章 人と人とのつながり(生殖、婚姻、家族、ネットワーク)  
7 社会的協力 一 家族、親族、年齢集団、利益集団  
2章 異文化への視線  
Lesson3 家族と親族 一 親と子は血のつながっているものか  
第3部 社会はどのように構築されるか「結婚 2つの古典の解読法」  
VI 性と婚姻、VII 家族と親族、VIII ジェンダーとセクシュアリティ

的(A印)なのは4(1995)と22(2005)の2点である。1999~2003年の間はまったく言及がなされていない。一部言及のうちの実質的(B印)な説明(3, 21, 23)を加えても、表の期間の始めと終わりに登場するだけである。

この状況は、シュナイダーが索引の項目としてあげられているかを見ると、もっと明らかである。まず索引そのものが無いものが10点あり、それに「項目無し」を合わせれば、18点になる。備考欄を参考にする、象徴論者として言及されるか、交叉イトコ婚の論争への関わりで多少は触れられることが分かる。

#### (ロ) 「ニーダム」の取り扱い

ニーダムの親族批判への言及はいっそう少ない。1(1991)と5(1995)がA印で、それ以外には21, 23で内容の一部が実質的に触れられるだけである。索引項目にあげられているかでは、(通過)儀礼に関する項目などで出ているのが目立つが、シュナイダーに比べて若干多いだけである。

(ハ) 表1でのA印からみて両者の論点を同時に扱うものはなかったことが分かる。ただし、B印の21(2005)と23(2006)では実質的に内容の一部であるとしても、両者への言及がある。これは最近になって生じた「復活」に結びつくことかもしれない。

(ニ) 上述のように多くは索引無しであるが、この省略は出版社側の販売戦略によることが主な原因と推測されるものの、執筆者側の編集に関わる詳細な事情は不明である。

### (4) 表2について

#### ① タイトル

表1の①で述べたように、いずれの出版物も本論で言う教科書を思わせるタイトルがつけられている。しかし、教科書的にみえても内容を特定のテーマ・範囲に限定したもの、あるいは、ある種の事典的な構成をとるものが何点か含まれている。それらに関しては、この期間にも、それ以前

の時期から続いて、従来の概説書のスタイルをとらず、各種の新しい編集方針によって独自の構成を積極的に試みた「非」教科書的な刊行物の増加が続いているのだと解釈できる。それらの中には、実際には親族に関する内容が章としてではなく、別の形で含まれている場合も少なくない。

## ② 章と節

その意味では、一概に親族の取り扱いが人類学の出版物の中で減少したわけでもないとも受け取れる。表2の備考欄に見るように、親族研究に関する章ないし節は全体の3分の2以上に存在する。しかし、本論の中心的な問題は、単に親族研究が教科書で1つの章を成しているかではない。欧米での論議を明示的に言及しないならば、あるいは、省略するならば、その理由が何らかの形で説明されているかを問うているのである。

## ③ 空白期間

親族研究の章を従前通り取り入れ続けた教科書の構成を行うという、後で少し触れるアメリカ型のやり方をとることもできたはずである。だが、その分野の研究が消滅したというなら、この人類学にとって大きな出来事を少しでも説明した上で目次構成からの省略がなされるべきであった<sup>11)</sup>。このように、本論の「はじめに」で取り上げた田口による分析とつなげてみると、20年とされる欧米での空白に比べて、全体的には日本では10年間にわたり、すくなくとも教科書における親族研究への関心の低下ないし消滅がみられると言えそうである。しかし、この消滅はいつの間にか起こり、いつの間にか復活し始めているのではなからうか。

# 3. アメリカの教科書

日本の教科書が親族の記述を取り入れなくなっていた期間に、アメリカの教科書は形式的には相も変わらず従来通りのスタイルを守っていた。同時期のアメリカの教科書を広く取り上げる作業はできなかったが、たまたま手もとにあり、いずれも版を重ねていることによってとりあえず代表的

と見なすことのできると思われる2冊を取り上げる<sup>12)</sup>。

それぞれの目次の中で、ここで論じていることに直接関連する部分は、以下に示すような章・節の構成となっている。

① ハビランド 1996『文化人類学』

Part III The Formation of Groups : Solving the Problem of Cooperation

8 Sex and Marriage

9 Family and Household

10 Kinship and Descent

11 Grouping by Sex, Age, Common Interest, and Class

ハビランドによる教科書では「第3部 集団の形成 ー協同の問題を解くー」に4つの「伝統的な」テーマで執筆された章が設けられている。しかし、文献一覧にはニーダムの文献が2点あるものの、索引にはシュナイダーもニーダムも出てこない。本文中には本論で検討したような親族研究消滅等の問題は取り上げられていない。ただし、アメリカにおける社会問題がトピックとして盛り込まれ、親族研究が社会の新しい状況にも関わることは示されるようになって<sup>13)</sup>。

② コタック 2000『人類学一人の多様性の探求』

13 Kinship and Descent

kin groups

descent and residence

kinship calculation

kinship terminology

14 Political Systems

(略)

15 Marriage

incest and exogamy

explaining the taboo

endogamy

marriage in tribal societies

divorce

plural marriages

## 16 Gender

gender among foragers

gender among horticulturalists

sexualities and gender

gender among agriculturalists

patriarchy and violence

gender and industrialism

what determines gender variation ?

コタックの教科書の関連する部分を見ると、13章、15章で伝統的なテーマを扱っている。そして、ハビランドの教科書と同じく、索引にも文献にもシュナイダーやニーダムは載せられていない<sup>14)</sup>。

端的に言って、少なくとも親族研究に関する限り、基本的には日本の教科書でもアメリカの教科書と同様のスタイルが続けて取られる必要があったと考えられる。人類学の歴史において積み重ねられてきた成果、とりわけ民族誌的な記録は基本的にさまざまな人類学的な考察の原点であり、それらの読解に親族の基礎知識は不可欠である。教科書は最先端を追うよりは、一定の体系をなした、多少古くなった説明に重きを置き、それに必要な補足を付け足せばよい。また、近年になって親族に関わる社会生活の重要な部分が消滅した社会はないのである。

## おわりに

日本で親族研究が改めて論議される契機として、「はじめに」では「欧米諸国における家族や親子関係のさまざまな問題の生起に対応した研究」が求められていると述べた。この点に注目した親族研究の大きな変化の優れ

た把握が、先にも言及した上杉富之の論文(2002)に提示されている。その中で、欧米での親族研究の急速な「復活」は、パラダイムの変化とテーマやトピックの移行とが同時進行で起こっており、その意味では「復活」ではなく「転換」であるという。この転換の大きな要因として、「家族の多様化やフェミニスト人類学による親族研究、さらにまた先端的生殖医療＝新生殖技術の急激な進歩」が取り上げられている。

それらをめぐって「再定義ないし再構築されつつある親子や家族、夫婦関係は、法規制など通して同時代に生きているわれわれすべてにはかり知れない影響を及ぼすであろう」から、真摯に取り組む必要がある<sup>15)</sup>。さらに「ややもすると単一の価値観や世界観を強調するグローバル化現象を通して語られがちな現代社会や文化を相対化する大きな可能性がある」からでもある、と今後の方向を上杉は示唆するのである(2002: 404)。

研究者レベルでこのような問題への取り組みが推進されるべきなのは言うまでもない。しかし、同時に、多くの人々の教育・教養ないし一般的な知識の水準でも広く理解されること、いいかえれば、どのように大切な問題が論じられているのかを多くの人々が的確に知る手段が提供されることも、同じく推進されるべきであろう。その意味で、専門的な研究書や論文においてだけでなく、教科書においてもこの親族研究の変化と新しい動向が持つ意味が正しく取りあげられることが望ましいと筆者は考えている<sup>16)</sup>。

日本においてこれに取り組むためには、欧米の生殖医療に関わる研究の進展を待たずとも、身近に生じている問題を利用することができたのである。養子や里子の問題、相続にまつわる親子のDNA鑑定、提供精子による人工授精と「本当の」父親を求める子どものニュース等々である。人類学者がそれらの身近にある問題の利用価値に気づくのが遅かったのではなかろうか。1998年には非配偶者間体外受精による遺伝的な母子関係のない子どもの出産に関するニュースも報じられていた。これらの話題から、私たちは親子関係をどう考えているのか、その前提に何があるか等を、人類学のテーマとしてもっと教科書レベルで扱うことができたと思われる。こ



うした話題からも親族に関わる研究や議論が進められていたなら、日本でも欧米の動向とは別に、あるいは少なくとも平行して、親族研究に新しい展開の契機が与えられ、研究レベルでもその「復活」が図られる可能性はあったと想像される。

以上はあくまでも限定された期間についての一般論である。もちろん、本論で扱う教科書の中にはその試みがかなり行われているものがあり、今回、「教科書」としては取り扱わなかった出版物の中に、すぐれた議論が展開されているものがあることは確かである。また、検討の対象となった期間において見られた教科書の多様性は歓迎すべきである。それでも、研究者レベルの関心とはある程度切り離して、大学の教育を考えると、従来からの親族研究が少し古くなったとしても一定の体系をなす知識・情報として知らせることは必要であろう。何も無いところで、はじめから脱構築させることも、流動化させることもできないからである。それ以上に、少なくとも教科書レベルで、いつのまにか親族研究が説明もなしに消えていき、そして、西欧の研究の変化に追随するかのように何となく復活する、という経緯は、「失われた10年」ともいいうる残念な事態であった。

## 註

- 1) 田口理恵「報告2 教科書・概説書に関するプロジェクト基礎資料について」、分科会「概説書を通してみる戦後日本の民族学・文化人類学」（代表者岡田浩樹）、2003年 日本民族学会第37回研究大会 於 京都文教大学
- 2) 文化人類学会関東地区研究懇談会 特別企画『未知の知をひめた古典』第5回の「今、改めてシュナイダーを読む」
- 3) たとえば、栗田博之 2003、清水昭俊 1987、1989a、1989b などその一部としてあげられる。もっとも「親族」とはいったい何かに関して、まだ合意はできていない。さらに「比較」の困難さは多くの研究者から指摘されはするものの、まだ当分は模索が続けられると想定される。
- 4) シカゴ大学の同僚であったフォーゲルソンは次のように回顧している。「彼はわたしの神経をいらつかせた。一方で彼は寛大で協力的に振るまい、たいへんに魅了する力をきりと放つこともできた。他方では、偏執病的な状態

にあるときには、執念深く意地悪で、破壊的に、時には自己破壊的になることがあった」といい、教授会も緊張に満ちていたと述べてから、「シュナイダーがシカゴ大学を去ってサンタ・クルスに行ったとき、別れの悲しみよりも安堵感を抱いたと白状する」(2001: 33)と言うのである。この回想をファインバーグやストーンが引用している。ファインバーグはそれに「シュナイダーの個性にある種の気まぐれが混じり込み、彼の同僚のうち少なからぬ者が暖かい励ましと個人的な軽蔑とを代わる代わる味わっていた」(2001: 19)と添え、ストーンは、シュナイダーの人生に付きまといたいいくつもの振れや変転が、その複雑な性格に大きな影響を与えたのではないかと示唆している(2004: 243)。

こうしたシュナイダーの個性は自伝的対談(Schneider on Schneider)の中にきわめて興味深く伺える。親族研究に「爆弾」を落とす行動にもその個性が大いに関係ありそうである。

- 5) 実際に利用したのは2003年の5刷である。ちなみにクーパーは親族の文化的研究に対して批判的な見解を述べている。
- 6) 本論では、吉岡(2005)の第4章の中で単配列・多配列が取り扱われた部分を参考にした。
- 7) 吉岡 2007「比較主義者ニーダムの比較研究」『アリーナ』(中部大学国際人間研究所編)第4号: 223-234。本論では、吉岡のサイトに公開された論文を用いた。[Http : //ccs.cla.kobe-u.ac.jp/Ibunka/kyokan/yoshioka](http://ccs.cla.kobe-u.ac.jp/Ibunka/kyokan/yoshioka) 07/01/11 確認
- 8) この「間接的にだが」という表現には、研究者によってシュナイダーをどう評価するかがかなり異なることの一部が表れている。筆者は、シュナイダーは後に展開される新しい親族研究を予期して従来の親族研究を批判・破壊したとは言えず、注5で示唆されたシュナイダーの性格によると思われる事柄も取り入れて解釈する必要があると考えている。シュナイダーは自伝的対談において、「今や不死鳥のごとく、焼け死んだ灰の中から(親族研究は)復活した」(1995: 193)と述べた上で、ゲイやレズビアンの研究、フェミニストの立場の研究などの新たな親族研究が始まったと話している。しかし、ファインバーグは、シュナイダーの性格も考慮して「限界はあるものの、彼はわれわれが親族、家族、ジェンダー、文化自体を考える方式を根本から変える手助けをした」と表現し、多面的に彼の貢献を評価すると結んでいる(2001: 25)。
- 9) 瀬川は、過去の親族研究こそ人類学者どうしのコミュニケーションを成り立たせてきた共通の知的基盤であった、と指摘する。現在でも親族が個々のフィールドで研究され続けているが、それを「個別社会における個人-社会

間の多様な媒介経路の一部として、各々の社会のコンテキストに即した深化を遂げる時期にきている」ととらえるのである (1997 : 56)。

- 10) 「代表的」といってもきわめて恣意的な選択にすぎない。本論の検討対象の期間には、他にも教科書と云うる刊行物も少なくない。特定分野を扱ったり、テーマが限定されたりするものの中には、親族研究に関しても、あるいは、その中の特定のトピックに関しても、興味深く有益な論考が含まれていることを見逃してはならない。なお、翻訳の教科書を今回は取り上げないでおいた。
- 11) その言及の仕方の例を挙げておこう。
- ① 文献1では、普遍的な婚姻の定義は無駄だとリーチが述べたということの引用に続いて、「又その10年後にもニーダムが『婚姻もまた半端な用語である。あらゆる記述の上でたいへん便利ではあるが、比較の上では有害無益であり分析上は何らの実用性もない』と再度述べざるをえなかったのである」(1991 : 71)と分担執筆者は記している。
- ② 文献4の分担執筆者は、核家族説を論じる中で、「核家族を普遍的と考えるもう一つの問題点は、その概念が夫婦の性関係と親子の血縁関係という西洋的な制度と民俗カテゴリーに立脚していることにある。シュナイダーは2つの異なる性格の愛 love の概念、つまり夫婦愛(性愛)と親子愛(性的意味は欠如した血縁者の愛)がアメリカ合衆国の民俗文化であると論じた」(1995 : 134)と述べている。
- ③ 文献5では分担執筆者は、「(前略一筆者)その際、個人を没個性的な自動人形としてとらえるのではなく、親族イデオロギーの道義性をどのように主体的に利用しているのかという側面にも注意を払わなければならない」といって、「こうした観点は、徹底的な親族観念の懐疑(『親族と婚姻再考』の編者としてのニーダム)や、(中略一筆者)、親族領域の解体(中略)とは異なる道を探ることを強く示唆している」(1995 : 33)とつなげている。
- ④ 文献28では、「しかし、20世紀最後の20年間で、こうした家族、親族研究の前提がさまざまな形で問い返される事になりました。まず、民族誌的には、それまでどの人間社会にも共通に存在すると仮定されてきた親子の絆についての認識が、実は文化的及び多様な解釈を伴うものであることが指摘されるに至りました。つまり、何が親一子、祖先一子孫の間を繋ぐ絆であるのかの解釈は、文化的に構築された民俗生殖理論によっており、社会毎に異なるものであるゆえに、親子関係というものを普遍的に定義する事は困難であるという批判です」(2006 : 60)と、シュナイダーやニーダムの名は挙げられていないが、分担執筆者は明確に述べている。
- 12) 桑山は1998年のNanda and Warms 著 *Cultural Anthropology* (6th ed.) を事

例に用いてアメリカの教科書の内容分析を行い、アメリカ人類学の研究及び教育動向を、検討している。教科書の多くは、(1) 文化人類学の概念と人類学の方法、(2) 文化の諸相 (3) 文化の変化と人類学の対応、という3部門から成ること、および、(2) の中で、経済・家族と結婚・親族・ジェンダー・政治・法律などが論じられるのが一般的だと述べている。

事例にもちいた教科書では、版が変わるにつれた内容の変化として、グローバル化を反映する項目と、ジェンダーに関する独立した章がおかれたことを、桑山は指摘する。ジェンダーの章中にシュナイダーからの影響を強く受けた Yanagisako and Collier 1987 (*Gender and Kinship*, Stanford) への言及はあるが、第8章「結婚、家族、家庭集団」と第9章「親族」の記述にはほとんど新しいものが見られなかったという。それは、新しい理論的展開を取り入れていないためだと桑山は受け止めている (2001 : 368)。

ちなみに上記の桑山の論文で言及されるヘンドリーの著作 (ここでは桑山による訳書) にはニーダムの批判がとりいれている (2002 : 221, 230)。なお、ニーダムに関連して、桑山は「同じ英語圏でも機能主義と象徴人類学を除いて、20世紀のイギリス人類学はほぼ無視されているという事実」も指摘している。

- 13) ハビランドは、現代アメリカの家族の変化、同性婚、恋愛感情、アメリカの女性の就労問題などを本文中で、あるいは、トピック欄で扱っている。
- 14) コダックの教科書では、アメリカに見られる「非」核家族の抱える問題について、「解体から多様性」という展望が示され、連続単婚 (serial monogamy) なども触れられる。

ついでながら、カーステン (Janet Carsten) は、アメリカの近年の教科書では、親族に関する箇所において従前と同じような章・節が大部分を占めた後に、最後の部分で生殖医療の技術に関連する内容を西欧社会の事例で説明するように構成されていることが多いのだ、と述べている (2004 : 23)。これは、本注および注 (13) に示した扱い、つまり、最近に西欧社会で生じた家族・親族問題の取り込みの、いわば次段階にあたる対応の仕方と言えよう。

- 15) 最近も、代理出産により子どもを得た女性が、裁判により母親の資格を認めるよう裁判を起こして、さまざまな世間の反応がみられた。その中には、出産の事実を越えて子どもの幸福を願うと考える人々が多いらしいことも伺え、これまで一般的だと考えられた「本当の」母子関係の解体が、さほど気づかれずに進みつつあるようにも解釈できる。DNA鑑定を決め手とする遺伝学的な納得の仕方と、社会学的な措置を優先させる考え方が、おそらく同一人の内にも混在しているような状態だと想像される。
- 16) 日本の大学教育における (人類学) 教科書のあり方、とりわけ購入して読む

という行為がなされなくなっている現状がまず論じられるべきであろう。もちろん出版自体を取り巻く状況の厳しさも問題である。

## 引用文献

(表2で示した文献は、本文中で用いた場合を除き、以下に再掲していない。)

上杉富之, 2002「新生殖技術時代の人類学—親族研究の転換と新たな時代—」『民族学研究』66(4): 389-413。

栗田博之, 2003「統制された比較—入口より先に進むのか?—」『民族学研究』68(2): 226-241。

桑山敬己, 2001「アメリカの文化人類学教科書の内容分析」『国立民族学博物館研究報告』25(3): 355-384。

清水昭俊, 1987『家・身体・社会—家族の社会人類学』東京: 弘文堂。

———, 1989a「I序説—六 親族関係の文化的構成, 七 家の多面的相貌—結論」『家族の自然と文化』東京: 弘文堂, pp. 37-57。

———, 1989b「第2章「血」の神秘—親子のきずなを考える」田邊繁治編『人類学的認識の冒険』東京: 同文館出版, pp. 45-68。

瀬川昌久, 1997「(1)人類学における親族研究の軌跡」青木保他編『岩波講座文化人類学 第4巻 個からする社会展望』東京: 岩波書店, pp. 27-60。

田中雅一, 1995「1 人類学のパラダイム—理論と現実」米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』京都: 世界思想社, pp. 14-34。

浜本まり子, 1994「4 血縁 血は水よりも濃いのか?」浜本 満, 浜本まり子編著『人類学のコモンセンス 文化人類学入門』東京: 学術図書出版社, pp. 61-77。

吉岡政徳, 2005『反・ポストコロニアル人類学』東京: 風響社

———, 2007「比較主義者ニーダムの比較研究」(注7参照)

Carsten, Janet, 2004 *After Kinship*. Cambridge: Cambridge University Press (本論には2005年の再版を用いた。)

Feinberg, Richard, 2001 Introduction: Schneider's Cultural Analysis of Kinship and Its Implications for Anthropological Relativism. In Feinberg, Richard and Martin Ottenheimer eds., *The Cultural Analysis of Kinship: The Legacy of David Schneider*. Pp. 1-31. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.

Haviland, William A., 1996 *Cultural Anthropology*, 8th ed. Fort Worth, Tex.: Harcourt Brace College Publishers (1st ed. in 1975)

Hendry, Joy, 1999(2002) *Introduction to Social Anthropology: Other People's Worlds*,

- London : Macmillan Press. (『社会人類学入門—異民族の世界』桑山敬己訳 東京 : 法政大学出版局)
- Kottak, Conrad P., 2000 *Anthropology : The Exploration of Human Diversity*, 8th ed. Boston : McGraw-Hill Higher Education (1st. ed. in 1974)
- Kuper, Adam, 1999 David Schneider : Biology as Culture, In *Culture : The Anthropologists' Account*. Pp. 22-158. Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
- Needham, Rodney, 1971 Remarks on the Analysis of Kinship and Marriage. In R. Needham ed. *Rethinking Kinship and Marriage*. Pp.1-33. London : Tavistock Pub.
- Schneider, D.M., 1972 What is kinship all about? In Priscilla Reining ed. *Kinship Studies in the Morgan Centennial Year*. Pp. 88-112. Washington, D.C. : The Anthropological Society of Washington.
- , 1980 *American Kinship : A Cultural Account*, 2nd ed. Chicago : University of Chicago Press. (1st. ed. in 1968)
- , 1984 *A Critique of the Study of Kinship*. Ann Arbor : University of Michigan Press
- , 1995 *Schneider on Schneider : The Conversion of the Jews and Other Anthropological Stories*. (Handler, Richard ed.) Durham and London : Duke University Press.
- Rivers, W.H.R. 1968 (1978) *Kinship and Social Organization* (LSE Monographs on Social Anthropology No. 34), London : Athlone Press. (『親族と社会組織』(人類学ゼミナール7)小川正恭訳 東京 : 弘文堂) (1914年刊のリヴァーズの同名書にR. ファースとD. シュナイダーが解説を付し, さらに「人類学的調査における系譜的方法」を加えて編集したものの全訳である。)
- Stone, Linda, 2001 Introduction : Theoretical Implications of New Directions in Anthropological Kinship, In Linda Stone ed. *New Directions in Anthropological Kinship*. Pp. 1-20. Lanham, Maryland : Rowman & Littlefield Publishers, Inc.
- , 2004 Introduction. In Robert Parkin and Linda Stone eds., *Kinship and Family : Anthropological Reader*. Pp. 241-256. Malden, Mass. : Blackwell Publishing Ltd.